

ネコと学ぶ ダイアートの本

日本で一番やさしいダイアートの教科書

無料冊子バージョン



はじめに

本書は、「もっとディベートのノウハウを広めたい」との思いから、「ディベートを全く知らない」「競技ディベートを始めたものの、ディベートの学び方が良く分からない」といった全国の中学・高校・大学生・社会人の方のために書かれた本です。

著者は競技ディベートを約15年間続けており、ディベートチームのコーチやディベートクラブの主宰等の活動に取り組み、のべ200人以上のディベーターの指導を行ってきました。

その経験の中で培ってきたディベートを学ぶためのノウハウを凝縮したのが本書です。第1章から第2章では「ディベートについて知る」ことを、第3章から第6章では「ディベートについて学ぶ」ことを、第7章から第9章では「ディベートについて実践する」ことを主眼に解説をしました。

「学ぶ」という言葉の語源が「まねぶ」から来ているように、最初は本書に掲載されている例を真似てディベートを行なって行って欲しいと思います。その上で、基本が身についたら自分なりのしっくりくる型を見つけ出すと良いでしょう。

本書はあくまでもディベートを実践していくための入門書に過ぎません。本格的にディベートで能力を磨きたいという方は、様々なディベート団体にて実際に実践を行なうことをおすすめします。

本書が、より多くの方がディベートを実践することの一助になれば、これに勝る喜びはありません。

武田 顕司

主な登場人物(ネコ)。



ひげねこ教授

立派な白ひげをたくわえたネコの教授。
日本語ディベートについての専門家らしい。
しゃべり方がとてもそれっぽい感じ。

白田たま

どこにでもいるような普通の白ネコの男の子。
日本語ディベートに興味があるらしく、教授に
ディベートについて教わっている。
東京は多摩地域、西国分寺の辺りに住んでいる。



ジュージ

エキゾチックという由緒正しき血統のネコ。
ひげねこ教授のお手伝いをしている。
九州男児なので「ジおす」としゃべる。

目次

第1章 ディベートとは？

ディベートにまつわる誤解	10
ディベートの定義	12
ディベートで培われる能力	14

第2章 ディベートのルール

勝敗のつけ方	18
ディベートの形式	20
議論のルール	22
禁止事項	24

第3章 ディベートの基礎

主張と根拠	28
証拠資料	30
文章表現	32

第4章 立論の作り方

立論の3要素	36
メリット・デメリット	38
1) メリットだと思うには	38
2) メリット・デメリットの3要素	39
3) プレインストーミングをしよう	40
4) 解決性(発生過程)を作る	42
5) 内因性(固有性)を作る	43
6) 重要性(深刻性)を作る	38
7) 立論の原稿化	45
カウンタープラン	48
1) カウンタープランの3要件	48

2) 非命題性	51
3) 優位性	51
4) 競合性	53
5) CPの原稿例	54
トポカリティ	55
1) トポカリティの要素	55
2) 基準の評価の仕方	57
3) トポカリティの原稿例	59
4) エクストラトポカリティ	60

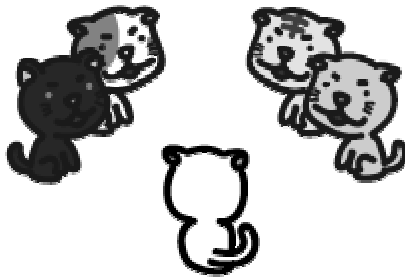
第5章 反駁の考え方

反駁の基本	64
1) 論証の不備をつく(ダウトをかける)	64
2) 反証する	66
3) 優位性をつける	67
再反駁の基本	69
1) 相手の反駁は当たっているか	69
2) 反証だけされた場合	70
3) 優位性をつけられた場合	70
まとめ	72
比較	74
反駁のポイント	76
1) メリット・デメリットへの反駁	76
2) ターンアラウンド	77
3) カウンタープランへの反駁	78
4) トポカリティへの反駁	79

反駁の4拍子	80
第6章 2立形式のディベート	
1立形式との違い	84
広がる戦略	86
第7章 ディベートを行なう準備	
原稿・フローシートを用意する	90
証拠資料を探そう!	92
文房具をそろえよう!	94
フローシートのとり方	96
第8章 モデルディベート	
モデルディベート	102
第9章 ジャッジ	
ジャッジの仕方	126
付録	129



第1章 デイバートとは？



ディベートにまつわる誤解



たま、さっそくだが、ディベートというとい、
どんなイメージがあるかな？

そうですね、相手を言い負かすようなイメージが
強いでしょうか。



なるほど。確かに世間では、「ディベートの達人は相手を
言いくるめるのがうまい」といった攻撃的な印象が持
たれている事が多いかもしれんのう。
しかし、それは間違いじゃ！

正しいディベートとは相手を言い負かすのではなく、議
論を交わし、**第三者を説得する討論**、言うなれば、紳
士のスポーツじゃ！！

そうなんですか！世間では間違ったディベートの
イメージが広まっているんですね！！



その通りじゃ。かつて、「ディベートとは何か」が曖昧な
まま言葉が一人歩きした事によって誤った認識が広まっ
てしまっているのじゃ。

主な誤解をまとめると次のようになるじゃろう。

＜ディベートにまつわる誤解と実際＞

[誤] 論題に関して探求するのが目的。

[正] シャッジを説得し、意思決定させるのが目的。

[誤] 肯定側、否定側、好きな方をやる!

[正] どちらをやるかはランダムで決定される。

[誤] 話したいことを話したいときに話したいだけ話す!

[正] 話すタイミング、また話すことのできる時間も
決まっている。

[誤] 一人で多人数を相手にする!

[正] チーム戦。チーム(2~4人)による対抗戦。

[誤] 論題はその場で発表される!

[正] 論題は数日前~数か月前に発表され、
その論題について本などで調べる。

こうしてみると、色々、誤解があるんだなあ。
じゃあ、「ディベート」って一体何だろう?



ディベートの定義



では、ディベートの定義について話す事としよう
「ディベート」とは元々、英語の「debate」の訳じゃ
日本語で、正確に「debate」を表す語が無かったた
めに、カタカナの「ディベート」が使われるようになったのじゃ

元々の「debate」の意味を英英辞典等で引いてみる
と…

- 「① 公的な問題をテーマにし、」
 - 「② 対立する複数の視点があって、」
 - 「③ 三者に説得的な」討論
- …ということが書いてあります！



その通りじゃ。この3つの条件を備えた討論は
全てディベートということになる。

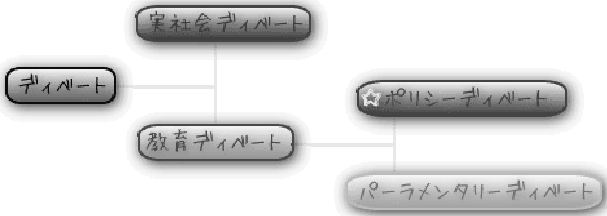
そして、ディベートの結果が実社会に影響を及ぼすも
のを「**実社会ディベート**」、訓練目的で行われるディ
ベートを「**教育ディベート**」と呼ぶのじゃ。
前者は裁判や学術論争など、後者は企業研修や競
技として行なうディベートなどが該当するのう。

教育デイバートの定義を明確にしておくよ、

- { ①与えられた公的な論題で、
 ②肯定側と否定側に分かれて、
 ③ジャッジを説得する } 討論 じや。



教育デイバートはさらに論証重視のポリシーデイバート (アカデミックデイバート) と、話し方重視のパラメンタリーデイバートに分類されるのじや。



本書では、この中でも「考える力」や「意思決定」の訓練として教育効果の高いポリシーデイバートについて扱っていくぞい!

長いので、ここからはポリシーデイバートのことを単に、「デイバート」と呼ぶことにしよう。



ディベートで"培われる能力"

教授、ディベートではどんな能力が身につくのでしょうか？



大別すると、「**情報処理能力**」「**考える力**」「**表現力**」の3つじゃ。もう少し詳しく説明していこう！

1 情報処理能力

ディベートでは、かみ合った議論の素材となる情報収集を行なう。そうした情報を探すリサーチ能力、集めた情報を整理してアウトプットする整序の力が養われるのじゃ。

2 考える力

ディベートでは、様々な「考える力」が養われる。情報を組み立て有効な論理を築く**論理的思考力**。相手に反論する際に論理を批判的に検証することで身につく**批判的思考力**。肯定と否定の立場をランダムに経験することによって物事を複数の視点から捉える**複眼的視野**。自分の主義と関係ない立場を経験することによってその立場を理解する**仮想的立場の理解力**。最終的に論題を肯定すべきか否定すべきか論理的に判定を下すことで**合理的意思決定能力**などが身につくのじゃ。

3 表現能力

ディベートでは、第三者に向かって限られた時間の中でスピーチを行なうため、**適切な表現や声量の選択**、刻々と変化する議論へ対応して臨機応変に主張の要点を聞き取る**傾聴力**などが要求され、**コミュニケーション能力**が培われるのじゃ。

ディベートやっているとき、
様々な能力が身につくんですね!スゴいなあ!!



たまたま、しかし世の中そんなに甘くないぞ。
こうした能力も一朝一夕には身につかないのじゃ。

…それはそうですね。一体、どれくらいで
能力が身につく実感を得られるのでしょうか?



例えるなら「筋力」と一緒に、実践すればする程、身につくものじゃ。ディベーターの中には、数回の試合経験でスピーチ力の向上を体感する人もいれば、十数年続けても新しい発見があると言う人もいる。筋力トレーニングと同じように長く続けることが成長の秘訣なんじゃ!

なるほど。自分のペースで“続けていく”ということが大事なんですね!!



ジョージのディベート相談室!



【相談】ディベートって、いつからあるんですか？

ディベートの発祥は、古代ローマとされているのでおます。武力闘争で国家を治める時代が終わり、ポリスが形成されるようになると、政治について盛んに議論が行なわれるようになりました。人々は政策について主張し、より多くの支持を得た人の政策が行なわれる、そうしたやりとりがディベートの原型と言われているのでおます。

そうした伝統を継承し、ディベートはイギリス型のパーラメンタリーディベートとアメリカ型のアカデミックディベートへと分かれていったのでおます。

日本最古のディベートは、大化の改新の頃という説や、福澤諭吉が行なったものという説があるのでおます。しかし、本格的に日本にディベートが入ってきたのは第二次世界大戦後で、朝日式討論会や矯正討論会、そして、ESSの英語ディベートで知られた。そして一度はディベートが日本に入ってきたものの、現在に連なるディベートの流れが起こったのは、1990年代といわれているのでおます。国際化や高度情報化社会が進展する中で、日本的な波風を立てないコミュニケーションから、堂々と自分の意見を主張していくコミュニケーションが必要とされる時代を背景に、教育現場や企業研修の場でディベートが広く普及を始めたのでおます。

このように、ディベートの歴史は古くて、日本にとっては新しいと言えるのでおます。

サングラスはニニまで!!!